

# 竜潭譚

泉鏡花

青空文庫



躑躅か丘つつじ おか

日は午ごなり。あらら木のたたら坂ぎに樹きの蔭かげもなし。寺てらの門もん、  
 植木屋うゑいの庭にわ、花屋はなやの店みせなど、坂下さしはさを挟くわみて町まちの入口いりぐちにはあたれど、  
 のぼるに従したがひて、ただ畑はたばかりとなれり。番小屋ばんこゝめきたるもの小  
 だかき処ところに見みゆ。谷やには菜なの花はな残りたり。路みちの右左みぎひだり、躑躅つつじの花はな  
くれない紅べになるが、見渡みわたす方かた、見返みかへる方かた、いまを盛さかなりき。ありくにつれ  
 て汗あせ少すくしいでぬ。

空そらよく晴はれて一点いっけんの雲うみもなく、風かぜあたたかに野面のづらを吹ふけり。

一人ひとりにては行くことなかれと、優やさしき姉上あねさまのいひたりしを、肯き

かで、しのびて来つ。おもしろきながめかな。山の上の方より一  
 とたば たきぎ 束の薪をかつぎたる漢おりに来れり。眉太く、眼の細きが、向ぎ  
 まに はちまき 願巻したる、額のあたり汗になりて、のしのしと近づきつ  
 つ、細き道をかたよけてわれを通せしが、ふりかへり、

「危ないぞ危ないぞ。」

といひずてに まなじりしわ 眦に皺を寄せてさつさつと行過ぎぬ。

見返ればハヤたらたらさがりに、その肩躑躅の花にかくれて、  
 かみゆ 髪結ひたる天窓のみ、やがて山蔭に見えずなりぬ。草がくれの  
 こみち 径遠く、小川流るる谷間の畦道を、菅笠冠りたる婦人の、  
 はだし 跣足にて鋤をば肩にし、小さき女の児の手をひきて彼方にゆく背  
 しろすがた 姿ありしが、それも杉の樹立に入りたり。

行く方も躑躅なり。来し方も躑躅なり。山土のいろもあかく

見えたる。あまりうつくしさに恐しくなりて、家路に帰らむと思

ふ時、わがゐたる一株ひとかぶの躑躅のなかより、羽音はおとたかく、虫のつ

と立ちて頬を掠かすめしが、かなたに飛びて、およそ五、六尺へだ隔てた

る処ところに礫つぶてのありたるそのわきにとどまりぬ。羽をふるふさまも見

えたり。手をあげて走りかかれれば、ぱつとまた立ちあがりて、お

なじ距離五、六尺ばかりのところにとまりたり。そのまま小石を

拾ねらひあげて狙ねらひうちし、石はそれぬ。虫はくるりと一ツまはりて、

また旧もとのやうにぞをる。追ひかくれば迅はやくもまた遁にげぬ。遁ぐる

が遠くには去らず、いつもおなじほどのあはひを置きてはキラキ

ラとささやかなる羽はばたきして、鷹揚おうようにその二ふたすぢの細ひげき鬚ひげを

上<sup>うえ</sup>下<sup>した</sup>にわづくりておし動かすぞいと憎<sup>にく</sup>さげなりける。

われは足<sup>あし</sup>踏<sup>づ</sup>みして心<sup>こころ</sup>いらてり。そのゐたるあとを踏<sup>ふ</sup>みにじりて、

「畜生、畜生。」

と呌<sup>つぶや</sup>きざま、躍<sup>おど</sup>りかかりてハタと打ちし、拳<sup>こぶし</sup>はいたづらに土に

よごれぬ。

渠<sup>かれ</sup>は一<sup>ひと</sup>足<sup>あし</sup>先<sup>かた</sup>なる方に悠<sup>ゆう</sup>々<sup>ゆう</sup>と羽<sup>は</sup>づくろひす。憎<sup>にく</sup>しと思<sup>おも</sup>ふ心を

籠<sup>こ</sup>めて瞻<sup>み</sup>りたれば、虫<sup>むし</sup>は動か<sup>か</sup>ずなりたり。つくづく見れば羽<sup>は</sup>蟻<sup>あり</sup>の

形<sup>かたち</sup>して、それよりもやや大<sup>おほ</sup>なる、身<sup>み</sup>はただ五<sup>ご</sup>彩<sup>さい</sup>の色<sup>いろ</sup>を帯<sup>お</sup>びて青<sup>あお</sup>み

がちにかがやきたる、うつくしさいはむ方<sup>かた</sup>なし。

色彩<sup>しき</sup>あり光<sup>こう</sup>沢<sup>たく</sup>ある虫<sup>むし</sup>は毒<sup>どく</sup>なりと、姉<sup>あね</sup>上<sup>のうへ</sup>の教<sup>おし</sup>へたるをふと思<sup>おも</sup>ひ

出<sup>い</sup>でたれば、打<sup>うち</sup>置<sup>お</sup>きてすごすごと引<sup>ひ</sup>返<sup>かえ</sup>せしが、足<sup>あし</sup>許<sup>もと</sup>にさきの

石の二ツに砕けて落ちたるより俄に心動き、拾ひあげて取つて返し、きと毒虫をねらひたり。

このたびはあやまたず、したたかうつて殺しぬ。嬉しく走りつきて石をあはせ、ひたと打ひしぎて蹴飛ばしたる、石は躑躅のなかをくぐりて小砂利をさそひ、ばらばらと谷深くおちゆく音しき。袂のちり打はらひて空を揚げば、日脚やや斜になりぬ。ほかほかとかほあつき日向に唇かわきて、眼のふちより頬のあたりむず痒きこと限りなかりき。

心着けば旧来し方にはあらじと思ふ坂道の異なる方にわれはいつかおりかけゐたり。丘ひとつ越えたりけむ、戻る路はまたさきとおなじのぼりになりぬ。見渡せば、見まはせば、赤土の道幅

せまく、うねりうねり果しなきに、はて両側つづきの躑躅の花、遠き方かたは前後を塞ふさぎて、日かげあかく咲込さきこめたる空のいろの真蒼まさおき下に、たたずイむはわれのみなり。

鎮守ちんじゆの社やしろ

坂は急ならず長くもあらねど、一つ尽つくればまたあらたにあらわ顕る。起伏あたかも大波の如く打うちつづき、いつ坦たんならむとも見えざりき。

あまり倦うみたれば、一ツおりてのぼる坂の窪くぼに踞みひし、手のあきたるまなま何なにならむ指もて土にかきはじめぬ。さといふ字も出来



たり。くといふ字も書きたり。曲りたるもの、直すぐなるもの、心の趣くままに落書らくがきしたり。しかなせるあひだにも、頬のあたり先刻きに毒虫の触れたらむと覚ゆるが、しきりにかゆければ、袖そでもてひまなく擦こすりぬ。擦りてはまたもの書きなどせる、なかにむつかしき字のひとつ形よく出来たるを、姉に見せばやと思ふに、俄にわかにその顔の見たうぞなりたる。

立たちあがりてゆくてを見れば、左右より小枝を組みてあはひも透すかで躑躅つづじ咲きたり。日影ひとしほ赤あこうなりまさりたるに、手を見たれば掌たなそこに照りそひぬ。

一文字にかけのぼりて、唯と見ればおなじ躑躅のだからだらおりなり。走りおりて走りのぼりつ。いつまでかかくてあらむ、こたび

こそと思ふに違たがひて、道はまた蜿うねれる坂なり。踏ふみ心地柔ごちやわらかく小石ひとつあらずなりぬ。

いまだ家には遠しとみゆるに、忍びがたくも姉の顔なつかしく、しばらくも得えた堪へずなりたり。

再びかけのぼり、またかけりおりたる時、われしらず泣きてゐつ。泣きながらひたばしりに走りたれど、なほ家ある処ところに至らず、坂も躑躅も少しもさきに異らずして、日の傾くぞ心細き。肩、背のあたり寒うなりぬ。ゆふ日あぎやかにぱつと茜あかねさして、眼もあやに躑躅の花、ただ紅くれないの雪の降積ふりつめるかと疑はる。

われは涙の声たかく、あるほど声を絞しぼりて姉をもとめぬ。一ひとたふたび三みたびして、こたへやすると耳すまを澄せば、遙はるかに滝の音聞

えたり。どうどうと響くなかに、いと高く冴えたる声の幽かすかに、

「もういいよ、もういいよ。」

と呼びたる聞えき。こはいとけなき我がなかまの隠れ遊びといふものするあひ凶なることを認め得たる、一ひとこえ声くりかへすと、ハヤきこえずなりしが、やうやう心たしかにその声したる方かたにたどりて、また坂ひとつおりて一つのぼり、こだかき所に立ちて瞰みおろせば、あまり雑作ぞうさなしや、堂の瓦屋根かわらやね、杉の樹立こたちのなかより見えぬ。かくてわれ踏迷ふみまよひたる紅くれなゐの雪のなかをばのがれつ。背後うしろには躑躅つつじの花飛び飛びに咲きて、青き草まばらに、やがて堂のうらに達せし時は一ひとかぶ株も花のあかきはなくて、たそがれの色けいだい境内みたらしの手洗水のあたりを籠こめたり。柵さく結ゆひたる井戸ひとつ、銀い

杏ちようの古ふりたる樹あり、そがうしろに人の家の土塀どべいあり。こなたは裏木戸のあき地にて、むかひに小さき稲荷いなりの堂あり。石の鳥居とりいあり。木の鳥居あり。この木の鳥居の左の柱には割れめありて太き鉄の輪を嵌はめたるさへ、心たしかに覚えある、ここよりはハヤ家に近しと思ふに、さきの恐しさは全く忘れ果てつ。ただひとへにゆふ日照りそひたるつつじの花の、わが丈たけよりも高き処ところ、前後左右を咲埋さきうずめたるあかき色のあかきがなかに、緑と、紅くれなひと、紫と、青せい白はくの光を羽色はいろに帯びたる毒虫のキラキラと飛びたるさまの広き景色のみぞ、画えの如く小さき胸にゑがかけける。

かくれあそび

さきにわれ泣きいだして救すくいを姉にもとめしを、渠かれに認められしぞ幸さいわいなる。いふことを肯きかで一人いで来きしを、弱りて泣きたりと知られむには、さもこそとて笑はれなむ。優やさしき人のなつかしけれど、顔をあはせていひまけむは口惜くちおしきに。

嬉うれしく喜ばしき思ひ胸にみちては、また急に家に歸らむとはおもはず。ひとり境内けいだいにたたずみしに、わツといふ声、笑ふ声、木の蔭、井戸の裏、堂の奥、廻廊の下よりして、五ツより八ツやまでなる児この五、六人前後あとさきに走り出いでたり、こはかくれ遊びの一人いちにんが見いだされたるものぞとよ。二人三人走ふたりみたりり来て、わが其処そこに立てるを見つ。皆瞳ひとみを集めしが、

「お遊びな、一いっしょ所にお遊びな。」とせまりて勧めぬ。小家こいえあちこち、このあたりに住むは、かたるといふものなりとぞ。風俗少しく異なれり。児こどもが親たちの家富とみたるも好きよき衣着きぬたるはあらず、大抵たいていはだし跣足はだしなり。三味線さみせん弾ひきて折おり々おりわが門かどに来きたるもの、溝みぞ川かわに鱒どじょうを捕とふるもの、附つけ木ぎ、草履ぞうりなど鬻ひぎに来きるものだちは、皆この児こどもが母なり、父なり、祖母そぼろなどなり。さるものとはとも遊あそぶな、とわが友は常いましに戒いましめつ。さるに町まち方かたの者ものとしいへば、かたみなる児こども尊とうとび敬うやみて、頃しぼらく刻くもともに遊あそばんことを希こいねがふや、親おやしく、優やさしく勉つとめてすなれど、不断つと断つはこなたより遠とほざかりしが、その時は先まにあまり淋さびしくて、友とも欲ほしき念ねんの堪たへがたかりしその心のまだ失うせざると、恐おそしかりしあとの樂たのしきとに、

われは拒こばまずして頷うなずきぬ。

児こどもはさざめき喜びたりき。さてまたかくれあそびを繰返す  
 とて、拳けんしてさがすものを定めしに、われその任にあたりたり。  
 おもておお  
 面を蔽へといふままにしつ。ひつそとなりて、堂の裏うらがけ崖をさか  
 さに落つる滝の音どうどうと松まつ杉すぎの梢こずえゆふ風に鳴り渡る。かす  
 かに、

「もう可いいよ、もう可いいよ。」

と呼ぶ声、笏こだまに響ひびけり。眼をあくればあたり静まり返りて、た  
 そがれの色また一ひと際きわ襲きたひ来きれり。大なる樹おおのすくすくとならべ  
 るが朦朧もうろうとしてうすぐらきなかに隠れむとす。

声したる方かたをと思ふ処ところには誰たれもをらず。ここかしこさがしたれ

ど人らしきものあらざりき。

また旧もとの境内けいだいの中央ちゆうおうに立ちて、もの淋しみしく曠みまわしぬ。山の奥おくにも響ひびくべく凄すさまじき音ねして堂どうの扉かどを鎖とぎす音ねしつ、闐げきとしてもものも聞きえずなりぬ。

親おやしき友ともにはあらず。常つねにうとましき兒こどもなれば、かかかる機おりり会あひを得えてわれをば苦くるめむとや企たくみけむ。身みを隠かくしたるまま密ひそに遁にげ去さりたらむには、探たづねばとて獲えらるべき。益やくもなきことをとふと思おもひうかぶに、うちすてて踵くびすをかへしつ。さるにても万も一いちわがみいだすを待ちてあらばいつまでも出いでくることを得えざるべし、それもまたはかりがたしと、心こころ迷まよひて、とつ、おいつ、徒いたに立たちて困こづずる折こしも、何い処ずより来きりしとも見みえず、暗くらうなりたる境内けい内



の、うつくしく掃はいたる土のひろびろと灰色なせるに際き立ちて、顔の色白く、うつくしき人、いつかわが傍かたわらにゐて、うつむきざまにわれをば見き。

極めて丈たけたか高き女なりし、その手を懐ふところにして肩を垂れたり。優やさしきこゑにて、

「こちらへおいで。こちら。」

といひて前さきに立ちて導きたり。見知りたる女ひとにあらねど、うつくしき顔の笑えみをば含みたる、よき人と思ひたれば、怪あやしまで、隠れたる児このありかを教ふるときとりたれば、いそいそと従ひぬ。

あふ魔まが時とき

わが思ふ処ところに違はずたが、堂の前を左にめぐりて少しゆきたる突あつきたりつに小いさきなり稲荷やしろの社あり。青き旗、白き旗、二、三本その前に立ちて、うしろはただちに山の裾すそなる雑樹ぞうき斜ななめめに生おひて、社の上おほを蔽おほひたる、その下のをぐらきところ処あな、孔くちの如ななめき空地くうちなるをソとめくばせしき。瞳ひとみは水のしたたるばかり斜ななめにわが顔を見て動けるほどに、あきらかにその心ぞ読まれたる。

さればいささかもためらはで、つかつかと社やしろの裏をのぞき込む、鼻うつばかり冷たき風あり。落葉、朽葉くちばす堆たかく水くさき土のほひしたるのみ、人の氣勢けはいもせで、頸えりもとの冷かなるに、と胸をつきて見返りたる、またたくまと思ふ彼の女かひとはハヤ見えざりき。何いずか

方たにか去りけむ、暗くなりたり。

身の毛よだちて、思はず啊あなや呀と叫びぬ。

人ひと顔がのさだかならぬ時、暗くき隅すみに行くゆべからず、たそがれの

片隅には、怪しきものゐて人を惑まどはすと、姉上の教へしことあり。

われは茫ぼう然ぜんとして眼を睜まなこりぬ。足ふるひたれば動きもならず、

固かたくなりて立ちすくみたる、左ひだり手に坂あり。穴の如く、その底よ

りは風の吹き出いづると思ふ黒闇こくあん々たる坂下より、もののぼる

やうなれば、ここにあらば捕へられむと恐しく、とかうの思慮も

なやさしろで社の裏の狭きなかににげ入りつ。眼を塞ふさぎ、呼い吸きをころし

てひそみたるに、四よつ足あしのものもの歩むけはひして、社の前を横よぎ

りたり。

われは人心地ひとこころもあらで見られじとのみひたすら手足を縮めつ。さるにてもさきひとの女のうつくしかりし顔、優やさしかりし眼を忘れず。ここをわれに教へしを、今にして思へばかくれたる児こどものありかひそにあらで、何らか恐しきもののわれを捕へむとするを、ここに潜ひそめ、助かるべしとて、導ごきしにはあらずやなど、はかなきことを考へぬ。しばらくして小提灯こちようちんの火影ほかげあかきが坂下より急ぎのぼりて彼方かなたに走るを見つ。ほどなく引返ひつかえしてわがひそみたる社やしろの前に近づきし時は、一人ならず二人三人連立ふたりみたりつれだちて来りきたし感あり。あたかもその立留たちどまりし折から、別なる登音あしおと、また坂をのぼりてさきおちあのものと落合おちあひたり。

「おいおい分らないか。」

「ふしぎだな、なんでもこの辺で見たといふものがあるんだが。」  
 とあとよりいひたるはわが家いえにつかひたる下男の声に似たるに、  
 あはや出いでむとせしが、恐しきものの然さはたばかりて、おびき出いだ  
 すにやあらむと恐しきは一ひとしほ増しぬ。

「もう一度念のためだ、田圃たんぼの方でも廻つて見よう、お前も頼む  
 。」

「それでは。」といひて上うえ下したにばらばらと分れて行く。

再び寂せきとしたれば、ソと身うごきして、足をのべ、板めに手を  
 かけて眼ばかりと思ふ顔少し差出さしだして、外との方をうかがふに、  
 何ごとともあらざりければ、やや落着おちつきたり。怪あやしきものども、何  
 とてやはわれをみいだし得む、愚おろかなる、と冷ひやかに笑ひしに、思ひ

がけず、誰たれならむたまぎる声して、あわてふためき遁にぐるがありき。驚きてまたひそみぬ。

「ちさとや、ちさとや。」と坂下あたり、かなしげにわれを呼ぶは、姉上の声なりき。

おおぬま  
大沼

「ゐないツて私わたしあどうしよう、爺じいや。」

「根ツからゐさつしやらぬことはござりますまいが、日は暮れまする。何せい、御心配なこんでござります。お前まえさま様遊びに出します時、帯むすびの結とんめを丁とたたいてやらつしやれば好よいに。」

「ああ、いつもはさうして出してやるのだけれど、けふはお前私にかかれてそツと出て行つたらうではないかねえ。」

「それはハヤ不念ぶねんなこんだ。帯の結めむすびさへ叩たたいときや、何がそれで姉様おふくろさまなり、母様おふくろさまなりの魂たましいが入るもんだで魔エテめはどうすることもしえないでござす。」

「さうねえ。」とものかなしげに語らひつつ、社やしろの前をよこぎりたまへり。

走りいでしが、あまりおそかりき。

いかなればわれ姉上をまで怪あやしみたる。

悔くゆれど及ばず、かなたなる境けいだい内の鳥居のあたりまで追ひかけたれど、早やその姿は見えざりき。

涙ぐみてたたず、ふと見る銀杏いちようの木のくらき夜の空に、大なるまる円まるき影まして茂れる下に、女のうしろすがた後うしろすがた姿ありてわが眼まなこを遮さへぎりたり。  
 あまりよく似たれば、姉上と呼ばむとせしが、よしなきものに  
 声かけて、なまじひにわが此ここ処こにあるを知られむは、拙つたなきわざな  
 ればと思ひてやみぬ。

とばかりありて、その姿またかくれ去りつ。見えずなればなほ  
 なつかしく、たとへ恐しきものなればとて、かりにもわが優やさしき  
 姉上の姿に化けしたる上は、われを捕へてむごからむや。さきなる  
 はさもなく、いま幻に見えたるがまことその人なりけむもわか  
 ざるを、何とて言ことばはかけざりしと、打泣うちなきしが、かひもあらず。  
 あはれさまさまのものあやの怪あやしきは、すべてわが眼まなこのいかにかせ



し作用なるべし、さらずば涙にくもりしや、術すべこそありけれ、か  
 なたなる御手洗みたらしにて清めてみばやと寄りぬ。

煤すすけたる行燈あんどうの横長きが一つ上にかかりて、ほととぎすの画え  
 と句など書いたり。灯ひをともしたるに、水はよく澄すみて、青こけき苔  
 むしたる石鉢いしばちの底もあきらかなり。手に掬むすばむとしてうつむく  
 時、思ひかけず見たるわが顔はそもそもいかなるものぞ。覚えず  
 叫びしが心を籠こめて、氣を鎮しずめて、両の眼まなこを拭ぬぐひ拭ぬぐひ、水のぞに臨ぞむ。  
 われにもあらでまたとは見るに忍びぬを、いかでわれかか  
 べき、必ず心の迷へるならむ、今こそ、今こそとわななきながら見  
 直したる、肩をとらへて声ふるはし、

「お、お、千里ちさと。ええも、お前は。」と姉上ののたまふに、縊すがり

つかまぐみかへりたる、わが顔を見たまひしが、

「あれ！」

といひて一足すさりて、

「違つてたよ、坊や。」とのみいひずてに衝つと馳はせ去りたまへり。  
怪あやしき神のさまざまのこととしてなぶるわと、あまりのことに腹  
立たしく、あしずりして泣きに泣きつつ、ひたばしりに追いか  
ぬ。捕へて何をかなさむとせし、そはわれ知らず。ひたすらもの  
の口惜くちおしければ、とにかくもならばとてなむ。

坂もおりたり、のぼりたり、大おお路みちと覚しき町にも出いでたり、  
暗こき径みちも辿たどりたり、野もよこぎりぬ。畦あぜも越えぬ。あとをも見  
ずて駈かけたりし。

道いかばかりなりけむ、漫々たる水面やみのなかに銀河の如く  
 横はりて、黒き、恐しき森四方をかこめる、大沼とも覺しきが、  
 前途を塞ぐと覺ゆる蘆の葉の繁きがなかにわが身体倒れたる、あ  
 とは知らず。

五位鷺

眼のふち清々しく、涼しき薫つよく薫ると心着く、身は柔  
 かき蒲団の上に臥したり。やや枕をもたげて見る、竹縁の障  
 子あけ放して、庭つづきに向ひなる山懐に、緑の草の、ぬ  
 れ色青く生茂りつ。その半腹にかかりある巖角の苔のなめ

らかなるに、いっちよう一挺はだかろう蠟に灯ひともしたる灯影ほかげすずしく、かけい笥の水かみむくむくと湧わきて玉たまちるあたりに鹽たらいを据たゑて、うつくしくゆ結うたる女ひとの、身みに一糸いもかけで、むかうざまにひたりてみたり。  
かけい笥の水はそのたらひに落ちて、あふ溢れにあふれて、地くぼの窪みに流  
 する音ねしつ。

ろう蠟の灯ひは吹くとなき山おろしにあかくなり、くらうなりて、ち  
 らちらと眼まなこに映うつずる雪ゆきなす膚はだえ白しろかりき。

わが寝返ねがえる音ねに、ふとこなたを見返みかへり、それと頷うなずく状さまにて、片  
 手をふちにかかけつつ片足ひとあしを立てて鹽たらいのそとにいだせる時とき、颯さと音  
 して、鳥からすよりはからす鳥とりの真白ましろきがひらひらと舞まひおりて、うつ  
 くしき人の脛はぎのあたりをかすめつ。そのままおそれげもなう翼よくを

休めたるに、ざぶりと水をあびせぎま莞爾とあでやかに笑うてたちぬ。手早く衣もてその胸をば蔽へり。鳥はおどろきてはたはたと飛去りぬ。

夜の色は極めてくらし、蠟を取りたるうつくしき人の姿さやかに、庭下駄重く引く音しつ。ゆるやかに縁の端に腰をおろすともにも、手をつきそらして振向きざま、わがかほをば見つ。

「気分は癒つたかい、坊や。」

といひて頭を傾けぬ。ちかまさりせる面けだかく、眉あざやかに、瞳すずしく、鼻やや高く、唇の紅なる、額つき頬のあたり臍に、たけたり。こは予てわがよしと思ひ詰たる雛のおもかげによく似たれば貴き人ぞと見き。年は姉上よりたけたまへり。知人には

あらざれど、はじめて逢ひし方かたとは思はず、さりや、誰たれにかあるらむとつくづくみまもりぬ。

またほほゑみたまひて、

「お前あれは斑はんみょう猫ねこといつて大変な毒虫なの。もう可いいね、まるでかはつたやうにうつくしくなつた、あれでは姉ねえさん様が見違へるのも無理はないのだもの。」

われもさあらむと思はざりしにもあらざりき。いまはたしかにそれよと疑はずなりて、のたまふままに領うなずきつ。あたりのめづらしければ起きむとする夜着よぎの肩、ながく柔やわらかにおさへたまへり。

「ぢつとしておいで、あんばいがわるいのだから、落着おちついて、ね、気をしづめるのだよ、可いいかい。」

われはさからはで、ただ眼をもて答へぬ。

「どれ。」といひて立つたる折、のしのしと道芝を踏む音して、つづれをまとうたる老夫の、顔の色いと赤きが縁近う入り来つ。

「はい、これはお児さまがござらつせえたの、可愛いお児じや、お前様も嬉しかろ。ははは、どりや、またいつものを頂きましよか。」

腰をななめにうつむきて、ひつたりとかの笥に顔をあて、口をおしつけてごつごつごつとたてつづけにのみたるが、ふツといきを吹きて空を仰ぎぬ。

「やれやれ甘いことかな。はい、参ります。」  
と踵を返すを、こなたより呼びたまひぬ。

「ぢいや、御苦労だが。また来ておくれ、この児こを返さねばならぬから。」

「あいあい。」

と答へて去る。山やま風かぜ颯さつとおろして、彼かの白き鳥たまた翔たちおりつ。黒くろきたらい盞たいのふちいに乗りて羽はづくろひして静はまりぬ。

「もう、風邪を引かないやうに寝させてあげよう、どれそんなら私も。」とて静しずかに雨戸かをひきたまひき。

ここのこだま  
九ツ罇

やがて添そい臥ふししたまひし、さきに水を浴ゆびたまひし故ゆえにや、わ



が膚はだをりをり慄然りつぜんたりしが何の心もなうひしと取とり縫すがりまら  
せぬ。あとをあとをといふに、をさな物語ふた二ツ三ツ聞かせ給たまひつ。

やがて、

「一ツひと餅こだま、坊ふたや、二ツ餅こだまといへるか。」

「二ツ餅。」

「三ツ餅み、四ツ餅よといつて御覽。」

「四ツ餅。」

「五ツ餅いっ。そのあとは。」

「六ツ餅む。」

「さうさう七ツ餅なな。」

「八ツ餅や。」

「このこだま九ツ罅——ここはね、このこだま九ツ罅といふところ処なの。さあもうおとなにして寝るんです。」

背に手をかけ引寄せて、玉たまの如きその乳房ちぶさをふくませたまひぬ。  
露あらわに白き襟えり、肩のあたり鬢びんのおくれ毛はらはらとぞみだれたる、  
かかるさまは、わが姉上とは太いたく違へり。乳ちちをのまむといふを姉上は許したまはず。

ふところをかいさぐれば常に叱しかりたまふなり。母上みまかりたまひてよりこのかた三年みとせを経へつ。乳ちちの味は忘れざりしかど、いまふくめられたるはそれには似にざりき。垂すいぎよく玉たまの乳房ちぶさただ淡雪あわゆきの如く含むと舌にきえて触るるものなく、すずしき唾つばのみぞあふれいでたる。

軽く背をさすられて、われ現になる時、屋の棟、天井の上と覺し、凄まじき音してしばらくは鳴りも止まず。ここにつむじ風吹くと柱動く恐しさに、わななき取つくを抱きしめつつ、  
 「あれ、お客があるんだから、もう今夜は堪忍しておくれよ、いけません。」

とキとのたまへば、やがてぞ静まりける。

「恐くはないよ。鼠だもの。」

とある、さりげなきも、われはなほその響のうちにももの叫びたる声せしが耳に残りてふるへたり。

うつくしき人はなかばのりいでたまひて、とある蒔絵もの手箱のなかより、一口の守刀を取出しつつ鞘ながら引そばめ、

雄々しき声にて、

「何が来てももう恐くはない。安心してお寝よ。」とのたまふ、  
たのもしき状さまよと思ひてひたとその胸にわが顔をつけたるが、ふ  
と眼をさましぬ。残燈ありあけ暗く床とこぼしら柱の黒うつややかにひかるあ  
たり薄き紫の色籠いろこめて、香こうの薰残かおりりたり。枕をはずして顔をあげ  
つ。顔に顔をもたせてゆるく閉とじたまひたる眼めの睫毛まつげかぞふるばか  
り、すやすやと寝入りてゐたまひぬ。ものいはむとおもふ心おく  
れて、しばし瞻みまもりしが、淋さびしさにたへねばひそかにその唇に指さ  
きをふれて見ぬ。指はそれで唇には届かでない、あまりよくねむ  
りたまへり。鼻をやつままむ眼をやおさむとまたつくづくうちと打ま  
もりぬ。ふとその鼻頭はなさきをねらひて手をふれしに空くうを捻ひねりて、う

つくしき人は雛ひなの如く顔の筋すじひとつゆるみもせざりき。またその  
 眼のふちをおしたれど水晶のなかなるものの形を取らむとするや  
 う、わが顔はそのおくれげのはしに頬をなでらるるまで近ちかぢか々と  
 ありながら、いかにしても指さきはその顔に届かざるに、はては  
 心いれて、乳ちの下おもてに面をふせて、強ひたひく額ひたいもて圧おしたるに、顔には  
 ただあたたかき霞かすみのまとふとばかり、のどかにふはふはとさはり  
 しが、薄うす葉よう一重ひとえの支さふるなく着きけたる額ひたいはつと下かたわらに落ち沈しむを、  
 心こころづ着きけば、うつくしき人の胸は、もとの如く傍かたわらにあをむきゐて、  
 わが鼻は、いたづらにおのが膚はだにぬくまりたる、柔やわらかき蒲ふとん団うもに埋うれ  
 て、をかし。

渡船 わたしがね

ゆめまぼろし  
 夢 幻 ともわかぬに、心をしづめ、眼をさだめて見たる、片  
 手はわれに枕させたまひし元のまま柔かに力なげに蒲団のうへに  
 垂れたまへり。

片手をば胸にあてて、いと白くたをやかなる五指をひらきて黄  
うごん 金の目貫キラキラとうつくしき鞆さやの塗ぬりの輝きたる小さき守まもりが  
たな 刀をしかと持つともなく乳ちのあたりに落して据すゑたる、鼻たか  
 き顔のあをむきたる、唇のものいふ如き、閉ぢたる眼めのほほ笑む  
 如き、髪たがのさらさらしたる、枕にみだれかかりたる、それも違は  
 ぬに、胸つるぎに剣をさへなのせたまひたれば、亡き母上のその時のさま

に紛まがふべくも見えずなむ、コハこの君きみもみまかりしよとおもふ  
 まはしきに、はや取除とりけなむと、胸むねなるその守まもり 刀がたなに手をかけ  
 て、つと引く、せつぱゆるみて、青あおき光眼まなこを射いたるほどこそあれ、  
 いかなるはずみにか血汐ちしおさとほとばしりぬ。眼まなこもくれたり。した  
 したとながれにじむをあなやと両こぶしの拳こぶしもてしかとおさへたれど、  
 留とどまらで、たふたふと音ねするばかりぞ淋りん漓りとしてながれつたへる、  
 血汐ちしおのくれなる衣きぬをそめつ。うつくしき人ひとは寂せきとして石像いしざうの如ごとく  
 静しずなる鳩みず尾おちのしたよりしてやがて半身たむしをひたしつく尽つくしぬ。おさへ  
 たるわが手てには血ちの色いろつかぬに、燈ともにしびすかす指ゆびのなかの紅くれないなるは、  
 人ひとの血ちの染そみたる色いろにはあらず、訝いぶしく撫なで試こころむる掌たなのその血汐ちしお  
 にはぬれもこそせね、こころづきて見定まむれば、かいやりし夜の

ものあらはになりて、すずしの絹をすきて見ゆるその膚はだにまとひ  
 たまひし紅くれないの色なりける。いまはわれにもあらで声こわだか高に、母上、  
 母上と呼びたれど、叫びたれど、ゆり動かし、おしうごかしした  
 りしが、効かいなくてなむ、ひた泣きに泣く泣くいつのまにか寝たり  
 と覺おぼし。顔あたたかに胸をおさるる心地こころに眼覚めぬ。空青く晴れ  
 て日影まばゆく、木も草もてらてらと暑きほどなり。

われはハヤゆうべ見し顔のあかき老夫おじの背せなに負はれて、とある  
 山路やまじを行ゆくなりけり。うしろよりは彼かのうつくしき人したがひ来  
 ましぬ。

さてはあつらへたまひし如く家に送うりたまふならむと推おしはかる  
 のみ、わが胸うちの中はすべて見すかすばかり知りたまふやうなれば、



わかれの惜おしきも、ことのいぶかしきも、取出とりいでていはむは益やくなし。教ふべきことならむには、彼方かなたより先んじてうちいでこそしたまふべけれ。

家に帰るべきわが運うんならば、強ひて止とどまらむと乞こひたりとて何かせん、さるべきいはれあればこそ、と大人おとなしう、ものもいはでぞ行く。

断崖そびの左右そびに聳そびえて、点てんてきこえ滴と声ころする処ところありき。雑ざつ草そう高こき径みちありき。松まつ柏かしわのなかを行ゆく処ところもありき。きき知らぬ鳥うたへり。褐色けものなる獣ありて、をりをりくさむらおど叢くさむらおどに躍り入りたり。ふみわくる道みちにもあらざりしかど、去年こぞの落葉道おちばを埋うづみて、人多かく通かよふ所ところとしも見えざりき。

をぢは一いちちよう挺おのの斧を腰にしたり。れいによりてのしのしとあ  
 ゆみながら、茨いばらなど生おひしげりて、衣きぬの袖そでをさへぎるにあへば、  
 すかすかと切つて払ひて、うつくしき人を通し参らす。されば山  
 路のなやみなく、高き塗ぬり下駄げたの見えがくれに長き裾すそさばきながら  
 来たまひつ。

かくて大沼おおぬまの岸に臨みたり。水は漫々として藍らんを湛たたへ、まば  
 ゆき日のかげも此処ここの森にはささで、水面をわたる風寒く、颯さつ  
 々として声あり。をぢはここに来てソとわれをおろしつ。はし  
 り寄れば手を取りて立ちながら肩を抱いだきたまふ、衣きぬの袖そで左右より  
 長くわが肩にかかりぬ。

蘆間あしまの小舟おぶねの纜ともづなを解きて、老夫おじはわれをかかへて乗せたり。一い

つしよ  
 緒つしよならではと、しばしむづかりたれど、めまひのすればとて乗  
 りたまはず、さらばとのたまふはしに棹さおを立てぬ。船は出いでつ。  
 わつと泣きて立たちあが上りしがよろめきてしりゐに倒れぬ。舟といふ  
 ものにははじめて乗りたり。水を切るごとに眼くるめくや、背後うしろ  
 にゐたまへりとおもふ人の大なる環わにまはりて前途ゆくてなる汀みぎわにゐた  
 まひき。いかにして渡し越したまひつらむと思ふときハヤ左手ゆんでな  
 る汀みぎわに見えき。見る見る右手めてなる汀みぎわにまはりて、やがて旧もとのうし  
 ろに立ちたまひつ。箕みの形したる大なる沼は、汀みぎわの蘆あしと、松の木  
 と、建たて札ふだと、その傍かたわらなるうつくしき人ともろともに緩ゆるき環わを描  
 いて廻めぐ転まし、はじめは徐おもむろにまはりしが、あとあと急はやになり、疾  
 くなりつ、くるくるくると次第ついでにこまかくまはるまはる、わが顔

と一尺ばかりへだたりたる、まぢかき処ところに松の木にすがりて見え  
たまへる、とばかりありて眼の前まへにうつくしき顔の朧ろうたけたるが  
莞爾にっことあでやかに笑えみたまひしが、そののちは見えざりき。蘆は  
繁しげく丈たけよりも高き汀みぎわに、船はとんとつきあたりぬ。

ふるさと

をぢはわれを扶たすけて船より出いだしつ。またその背せなを向けたり。  
「泣くでねえ泣くでねえ。もうぢきに坊ツさまの家うちぢや。」と慰  
めぬ。かなしさはそれにはあらねど、いふもかひなくてただ泣き  
たりしが、しだいに身のつかれを感じて、手も足も綿の如くうち

かけらるるやう肩に負はれて、顔を垂れてぞともなはれし。見覚  
えある板塀いたべいのあたりに来て、日のややくれかかる時、老夫おじはわ  
れを抱いだき下おろして、溝のふちに立たせ、ほくほく打うちゑみつゝ、慇いんぎ  
懃んに会え釈しやくしたり。

「おとなにしさつしやりませ。はい。」

といひずてに何地いずちゆくらむ。別れはそれにも惜おしかりしが、あ  
と追ふべき力もなくて見おくり果てつ。指かたす方もあらでありくと  
もなく歩ほをうつすに、頭かしらふらふらと足の重おもたくて行ゆ悩なやむ、前に  
行くも、後ろに帰るも皆見知越みしりごしのものなれど、誰たれも取りあはむ  
とはせで往ゆきつ来きたりつす。さるにてもなほものありげにわが顔を  
みつつ行ゆくが、冷ひややかに嘲あざけるが如く憎にくさげなるぞ腹はら立だしき。おも

しろからぬ町ぞとばかり、足はわれ知らず向直りて、とほとほとまた山ある方かたにあるき出いだしぬ。

けたたましき登音あしおとして、驚わしづかみに襟えりを掴つかむものあり。あなやふりかえと振返ふりかえればわが家の後いえ見せる奈四郎うしろみといへる力逞ちかたくましき叔父すせの、凄すさまじき気色けしきして、

「つままれめ、何処どこをほつつく。」と喚わめきざま、引立ひつたてたり。また庭ひきいに引出ひきいして水をやあびせられむかと、泣なきさけ叫なびてふりもぎるに、おさへたる手をゆるべず、

「しつかりしろ。やい。」

とめくるめくばかり背を拍うちて宙うにつるしながら、走りて家に帰かえりつ。立騒たちさわぐ召めしつかひどもを叱しかりつも細引ほそびきを持って来こさせて、

しかと両手をゆはへあへず奥まりたる三畳の暗き一室ひとまに引立ひつたてゆきてそのまま柱いましに縛めたり。近く寄れ、喰くいさきなむと思ふのみ、齒がみして睨にらまへたる、眼めの色こそ怪あやしくなりたれ、逆さかつりたるまなじり 眦まなじりは憑よきもののわざよとて、寄りたかりて口々にののしるぞ無念なりける。

おもての方かたさざめきて、何処いづくにか行ゆきをれる姉上あね帰りましつとおぼ 覚おぼし、襖ふすまいくつかぱたぱたと音してハヤここに来たまひつ。叔父おじは室しつの外うへにさへぎり迎へて、

「ま、やつと取返とりかえしたが、繩を解いてはならんぞ。もう眼が血走つてゐて、すきがあると駈かけ出すぢや。魔エテどのがそれしよびくでの。」

と戒めたり。いふことよくわが心を得たるよ、しかり、隙ひまだにあらむにはいかでかここにとどまるべき。

「あ。」とばかりにいらへて姉上はまろび入りて、ひしと取とりつ着きたまひぬ。ものはいはでさめざめとぞ泣きたまへる、おん情なさけ手てにこもりて抱いだかれたるわが胸絞しぼらるるやうなりき。

姉上の膝ふに臥ふしたるあひだに、醫師きた来りてわが脈きをうかがひなどしつ。叔父は醫師とともに彼方あなたに去りぬ。

「ちさや、どうぞ気をたしかにもつておくれ。もう姉様ねえさんはどうしようね。お前、私だよ。姉さんだよ。ね、わかるだらう、私だよ。」

といきつくづくちつとわが顔を見まもりたまふ、涙痕るいこんしたた



るばかりなり。

その心の安んずるやう、強<sup>し</sup>ひて顔つくりてニツコと笑うて見せぬ。

「おお、薄<sup>うす</sup>氣<sup>き</sup>味<sup>み</sup>が悪いねえ。」

と傍<sup>かた</sup>にありたる奈<sup>な</sup>四<sup>し</sup>郎<sup>ろう</sup>の妻<sup>つま</sup>なる人<sup>ひと</sup>呟<sup>つぶ</sup>き<sup>や</sup>て身<sup>み</sup>ぶ<sup>る</sup>ひ<sup>し</sup>き。

やがてまた人々<sup>ひとびと</sup>われを取<sup>とり</sup>巻<sup>ま</sup>きてありしことども責<sup>せ</sup>む<sup>る</sup>が如<sup>ごと</sup>くに

問<sup>と</sup>ひ<sup>ぬ</sup>。くはしく語<sup>う</sup>り<sup>て</sup>疑<sup>う</sup>た<sup>が</sup>い<sup>い</sup>を解<sup>と</sup>か<sup>む</sup>とおもふに、をさなき口<sup>くち</sup>の順<sup>のり</sup>

序<sup>しり</sup>正<sup>ただ</sup>しく語<sup>う</sup>るを得<sup>え</sup>むや、根<sup>ね</sup>問<sup>と</sup>ひ、葉<sup>は</sup>問<sup>と</sup>ひするに、一<sup>いち</sup>々<sup>いち</sup>説<sup>せ</sup>明<sup>めい</sup>か<sup>さ</sup>む

に、しかもわれあまりに疲<sup>つか</sup>れたり。うつつ心に何<sup>なに</sup>をかひ<sup>ひ</sup>たる。

やうやくいましめはゆるされたれど、なほ心の狂<sup>くる</sup>ひたるものとしてわれをあしらひぬ。いふこと信<sup>ま</sup>ぜ<sup>ら</sup>れ<sup>ず</sup>、する<sup>こと</sup>皆<sup>みな</sup>人<sup>う</sup>た<sup>が</sup>い<sup>い</sup>の疑<sup>ぎ</sup>

を増すをいかにせむ。ひしと取籠めて庭にも出さで日を過しぬ。  
 血色わるくなりて瘦せもしつとて、姉上のきづかひたまひ、後  
 見の叔父夫婦にはいとせめて秘しつつ、そとゆふぐれを忍びて、  
 おもての景色見せたまひしに、門辺にありたる多くの児ども我が  
 姿を見ると、一斉に、アレさらはれものの、氣狂の、狐つき  
 を見よやといふいふ、砂利、小砂利をつかみて投げつくるは不断  
 親しかりし朋達なり。  
 姉上は袖もてわれを庇ひながら顔を赤うして遁げ入りたまひつ。  
 人目なき処にわれを引据ゑつと見るまに取つて伏せて、打ちたま  
 ひぬ。

悲しくなりて泣出せしに、あわただしく背をばさすりて、

「堪忍かんにんしておくれよ、よ、こんなかはいさうなものを。」

といひかけて、

「私わたしあもう気でも違ひたいよ。」としみじみと搔かきくど口説きたまひたり。いつのわれにはかはらじを、何とてきはあやまるや、世にただ一人なつかしき姉上までわが顔を見るごとに、氣たしかを確たしかに、心を鎮しずめよ、と涙ながらいはるるにぞ、さてはいかにしてか、心の狂ひしにはあらずやとわれとわが身を危あやぶむやうそのたびになりまさりて、果はてはまことにものくるはしくもなりもてゆくなる。

たとへば怪あやしき糸いとの十重とえ二十重はたえにわが身をまとふ心地こころちしつ。しだいしだいに暗くらきなかに奥深くおちいりてゆく思おもいあり。それをば刈かり払はらひ、遁のがれ出いでむとするにその術すべなく、なすこと、

人見て必ず、眉まゆを顰ひそめ、嘲あざけり、笑わらひ、卑いやしめ、罵ののしり、はた悲かなしみ憂うれひなどするにぞ、氣こころあがり、心こころ激げきし、ただじれにじれて、すべてのもの皆われをはらだたしむ。

口くち惜おしく腹はら立たしきまま身の周圍まわりはことごとく敵かたきぞと思おもわるる。

町も、家も、樹とりも、鳥籠かごも、はたそれ何らのものぞ、姉あねとてま

ことの姉あねなりや、さきには一ひとたびわれを見てその弟あにを忘れしことあり。塵ちり一つとしてわが眼まなこに入るは、すべてものの化けしたるにて、

恐おそしきあやしき神かみのわれを悩なやまさむとて現げんじたるものならむ。さ

ればぞ姉あねがわが快かい復ふくを祈ことば言こともわれに心こころを狂くるはすやう、わざと

さはいふならむと、一ひとたびおもひては堪たふべからず、力ちからあらば恣ほし

にともかくもせばやせよかし、近ちかづかば喰くひさきくれむ、蹴け飛とば

しやらむ、搔かきむしらむ、透すきあらばとびいでて、九ツこのこ苮たまとをしへたる、たうときうつくしきかのひとの許もとに遁にげ去らむと、胸の湧わきたつほどこそあれ、ふたたび暗室にいましめられぬ。

千呪せんじゆ陀羅尼だらに

毒ありと疑へばものも食はず、薬もいかでか飲まむ、うつくしき顔したりとて、優やさしきことをいひたりとて、いつはりの姉にはわれことばもかけじ。眼にふれて見ゆるものとしいへば、たけりくるひ、罵のり叫のびてあれたりしが、つひには声も出いでず、身も動かず、われ人をわきまへず心地こころち死ぬべくなれりしを、うつらうつ

ら昇かきあげられて高き石壇をのぼり、大なる門おおいを入りて、赤土あかつち  
 の色きれいに掃はきたる一ひとすじ条の道長き、右左、石燈籠いしどうろうと石榴ざくろの  
 樹の小さきと、おなじほどの距離にかはるがはる続きたるをゆ行き  
 て、香こうの薫かおりしみつきたる太きまるばしら円ま柱きわの際きわに寺の本堂に据すゑられ  
 つ、ト思ふ耳のはたに竹を破わる響ひびききこえて、僧ども五ご三さん人にん一にん齊にん  
 に声こゑを揃そろへ、高らかに誦じゆする声耳こゑを聳ろうするばかり喧かしましき堪たふべ  
 からず、禿とくろ顛てんならびある木のはしの法師ほふしばら、何をかすると、拳こぶし  
 をあげて一人にんの天窓あたまをうたむとせしに、一ひとば幅ばの青き光颯さつと窓を  
 射やて、水晶の念ねん珠じゆ瞳とみをかすめ、ハツシと胸をうちたるに、ひる  
 みて踞うずくまる時、若じやく僧そう円えん柱ちゆうをいざり出いでつつ、ついで、サラ  
 サラと金きん欄らんの帳とばりを絞しぼる、燦さん爛らんたる御廚みずし子のなかに尊とうき像すがたこそ

拝まれたれ。一段高まる経の聲、トタンにはたたがみ天地てんちに鳴りぬ。

端たんげん嚴みみ微妙ようのおんかほばせ、雲そでの袖かすみ、霞はかまの袴ちらちらと瓔ようら珞くをかけたまひたる、玉たまなす胸むねに織せん手しゆを添そへて、ひたと、を  
 さなごを抱いだきたまへるが、仰あおぐ仰あおぐ瞳ひとみうごきて、ほほゑみたまふ  
 と、見たる時、やさしき手のさき肩かたにかかりて、姉上あねは念ねんじたま  
 へり。

滝たきやこの堂どうにかかるかと、折ましも雨あめの降ふりしきりつ。渦うずいて寄よ  
 する風の音ね、遠かたき方かたより呻うなり来きて、どつと満まん山ざんに打うちあたる。

本堂ほんどう 青あお光ひかりして、はたたがみ堂どうの空そらをまるびゆくひざに、たまぎ  
 りつつ、今は姉上あねを頼たのまでやは、あなやと膝ひざにはひあがりて、ひ

しとその胸を抱きたれば、かかるものをふりすてむとはしたまは  
 で、あたたかき腕はわが背にて組合はされたり。さるにや氣も心  
 もよわよわとなりもてゆく、ものを見る明かに、耳の鳴るがやみ  
 て、恐しき吹降りふきぶのなかに陀羅尼だらにを呪じゆする聖ひじりの聲こえ々々さわやかに  
 聞きとられつ。あはれに心細くもの凄すげきに、身の置おき処ところあらず  
 なりぬ。からだひとつ消えよかしと両手を肩に縋すがりながら顔もて  
 その胸を押しわけたれば、襟えりをば搔かきひらきたまひつつ、乳ちの下  
 にわがつむり押入れて、両袖りようそでを打かさねて深くわが背せなを蔽おほひ  
 給たまへり。御仏みほとけのそのをさなごを抱いだきたまへるもかくこそと嬉うれし  
 きに、おちゐて、心地こころちすがすがしく胸のうち安く平たいらになりぬ。  
 やがてぞ呪じゆもはてたる。雷らいの音も遠ざかる。わが背せをしかと抱いだき



たまへる姉上の腕かいなもゆるみたれば、ソとその懐ふところより顔をいだして  
 こはごはその顔をば見上げつ。うつくしさはそれにもかはらでな  
 む、いたくもやつれたまへりけり。雨風のなほはげしく外おもてをうか  
 がふことだにならざる、静まるを待てば夜よもすがら暴通あれとおしつ。  
 家に帰るべくもあらねば姉上は通夜つやしたまひぬ。その一夜の風雨  
 にて、くるま山の山中、俗このこたまに九ツ罅といひたる谷、あけがたに杣そま  
 のみいだしたるが、忽たちまち淵ふちになりぬといふ。

里の者、町の人皆みな挙こぞりて見にゆく。日を経へてわれも姉上とともに  
 来きたり見き。その日一いつてん天うららかに空の色も水の色も青く澄すみ  
 て、軟風なんふうおもむろに小波ささなみわたる淵の上には、塵ちり一葉ひとの浮べる  
 あらで、白き鳥の翼つばさ広きがゆたかに藍碧らんぺきなる水面を横よこぎりて舞

へり。

すさまじき暴風雨なりしかな。この谷もと薬研の如き形したり  
きとぞ。

幾株いくかぶとなき松まつ柏かしわの根こそぎになりて谷間に吹倒ふきたおされし

に山腹の土落つちちたまりて、底をながるる谷川をせきとめたる、お  
のづからなる堤防をなして、凄すさまじき水をば湛たへつ。一たびこの  
ところ決潰けつかいせむか、城じやうの端の町は水底みなそこの都となるべしと、人  
々の恐れまどひて、怠おこたらず土を装もり石を伏ふせて堅き堤防を築きし  
が、あたかも今の関屋少将せきやの夫人姉上十七の時なれば、年つもり  
て、嫩ふたばなりし常磐木ときわぎもハヤ丈たけのびつ。草生おひ、苔こけむして、いにし  
へよりかかりけむと思まがひ紛まがふばかりなり。

あはれ礫<sup>つぶて</sup>を投ずる事なかれ、うつくしき人の夢や驚かさむと、  
血気なる友のいたづらを叱<sup>しか</sup>り留<sup>とど</sup>めつ。年若く面清<sup>おもぎよ</sup>き海軍の少尉候  
補生は、薄暮<sup>はくぼ</sup>暗碧<sup>あんぺき</sup>を湛<sup>たた</sup>へたる淵<sup>ふち</sup>に臨みて 肅<sup>しゆく</sup>然<sup>ぜん</sup>とせり。



# 青空文庫情報

底本：「鏡花短篇集」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年9月16日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第三卷」岩波書店

1941（昭和16）年12月

初出：「文芸倶楽部」

1896（明治29）年11月

入力：砂場清隆

校正：松永正敏

2000年8月30日公開

2005年12月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 竜潭譚

## 泉鏡花

2020年 7月12日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>